京傳十生粉の紅鹽

上

京傳作

通油町鶴喜版

へ13
2056
20

京傳主十六利鑑序

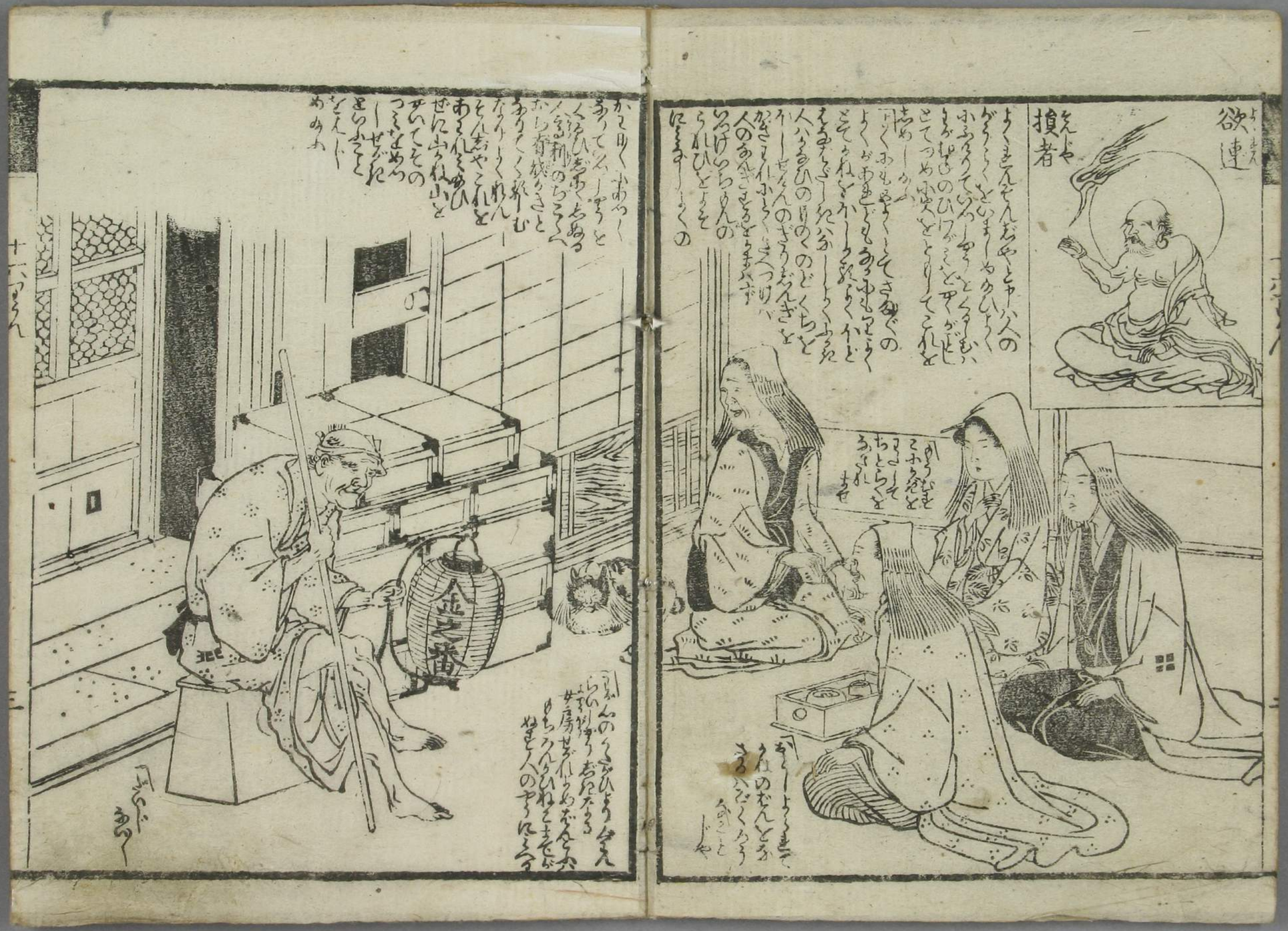
阿羅漢の形容箇々一様なれば鐸をとりて衣とわとり鉢とあげて食とこひ虎と養ひ龍を育。坐せるあり。卧わと或ハ耳目或ハ笑亦是人間世を營に一般人の心動もすれバ喜怒哀楽に迷惑して。種々様々の形容をふし権も静なるすがたを画ようつし言ふいぐさ則這稗史の如なるん。書肆余ゞ愚名を以て這書の戯号をすいとなぐ亦云。

寛政十一年
己未春

醒世老人京傳識

羅漢と仏菩薩と
あのいろや
えんびとかんで
えんくまよ
えんとろよ

そのこの祝えんより
これぜさいこと
十六ハ初りんとあり
くるゆるんより
ぜんぜんハ長ち
ぜんぜんハ長ち
ぜんぜんハ長ち


欲連
えんや
損者
金之番

我慢損者

ふるまひ水

借越損者

貧須盧損者

奢羅損者

京傳全集十六 中

粉引京傳作

鹽

通油町 鶴喜版

小利大損者

棒陀羅拵者
今日大師へどーや
孤鶴觀龍酒入山門

悔気損者
胸

邪見損者

遊者

損者

短氣者損者
堪忍

京傳主（下）
十六利鑑

京傳作

通油町
鶴喜版

煩悩損者

朝寝者損者

多辯損者

たべんをるくハぶべんうそと
つりめのあれがべんそんや
くきぬきとりて
うそつく
ちさとぬく
べーといまーわのみ
くちハわぐちもいの
ねありこめつるさきへ
のごとういちごえの
ことばふてんとをぶることを
あひ身とをぶることを
あり

あいさうで
のむひとあこる
まるくうかのまふ
あいさうさあれ
ろくろくびで
ぶよござりま
しゃく
ごらや
ごらや
くらや
くらや
ぺーやく

ござりますのさ
り紙女八でも
ろあるしのく
さ

おこうつ
ござり
らも

おひとふの
ぶるのきこを
りろくれかろ
くしゃいかろ
ぶをそろしゃ
ぶるくらや
くしゃべらや
くくくく

ものいハば
くちびる
さむし　秋の夜

こゝはさべんと
りあるあるこ
むをなのく
あり女ハハ
づゝして
たべんおか
それくも
さべえハ
ちんじゃ
つしく
ようく

文盲撫者

迷者慎者

十六ぢうえんのくうんぢうとまうふ
そんぢやーくやなてまろくしたけ十六の
えんぢやくつまるところハおのしが
心ぢういろるあり　ちさいとし
ぢまとびろーやー　えんのある
ことなりーかーこけーえんおいも
ぐるみてかりうまれいるあり
ぢゆふゆいーんのえぐこーん
しゆうどこハのあり
あやまりきもうぢ
きかのいーやーこあれ
ぐんのんとまうー
まこんふーこたちのけ
のけいこあれぐんの
まこひとろどー
んぐとまうさんむ
ト　あやうーきこと
ぢまのちゆまーこと
ぢうてぢんかんと

五

五

ぢうる人のこころ
このごろーとく
まーこハえんぢや
ぢえ
「千ぢうや
るひととーの
こころよう
「ぢうゆ　ゆそ
さこうぢえ

迷

「これハてんとびあり
太ちうじんときこハ
ぢうゆるされさぐ

口上
京傳店紙多そこ入
るひれぐ　ちんぐ
くふう仕ゐところ
ぢうれハぐつして
めつらしきこんぐ
夏中よろうとうの
ア　ぢ　ノ　出来仕ゐ

十五

佛門元自導昏衢
比論香花方便燈
相照新圖羅漢像
京傳前世一狂僧

京山陳人題

山東京傳作